



第1回：年末の灯油と、思考の補助線

私は二十年以上、福祉の現場に関わってきた。

振り返れば、「楽しかった」という記憶よりも、「苦しかった」「しんどかった」と感じた場面の方が多いかもかもしれない。

現場では常に判断が求められる。

新人であっても、肩書きを持って現場に立つ以上、一定の方向づけを迫られる。アセスメントを行い、持ち帰り、上席者に報告し、次の方針を確認する——そのような体制が整っている職場もある。しかし、必ずしもすべての現場がそうとは限らない。私自身、相談相手が十分にいない状況の中で、孤独な判断をせざるを得ない時期があった。

振り返れば、私の仕事は決断の場面の連続だった。

それは職務上の場面に限らない。生活のさまざまな局面でも、最終的に決めることの

重さは常につきまっていた。福祉の職場では「見立てをし、判断を重ねる」ことを徹底して教え込まれる。記録一つをとっても、そこには判断の跡が残る。適切な判断ができる人は信頼を集める。その環境の中で、私はどこかで「迷いなくスマートに判断できる人間になりたい」と願っていたのだと思う。

やがて年齢を重ね、今度は部下の決断を支える立場になった。主体は部下にありながら、最終的な責任は自分が負う。その構造の中で、私は改めて思うようになった。職業人としての成長とは、無数の判断の場面を一つひとつ引き受けていくことなのだと。そうした積み重ねの先に、ある出来事があった。

ある年の年末、一本の相談が寄せられた。余命宣告を受けたという男性のことだった。相談者は本人ではなく、同じボランティア活動に参加していた方である。

主訴は「灯油を運べない」という、ごく日常的で切実な困りごとだった。離婚後ひとりで暮らしており、頼れる家族も近隣との深い付き合いもない。大きな支援を求めているわけではない。ただ、寒い時期を越えるために限定的に助けてほしいという、控えめなSOSだった。

制度を使う道はあった。介護保険の申請、暫定的なサービス導入。しかし、その日は仕事納めの夕方で、地域包括支援センターも翌日から休みに入る。動き出すには時間が足りなかった。

私は当時、個別支援の担当ではなく、地域づくりやボランティアセンターの立場にあった。職務としてどこまで関わるのか。直接支援に踏み込むことはできない。しかし、何もしないという選択も現実的ではない。関係機関に相談をしても、年末という時間的制約の中では動きようがない。中途半端に私が動けば、年明けにかえって混乱を生む可能性もある。

判断は、どこにも預けられなかった。

最終的に私は、ボランティアの方々の意向を確認しながら、困ったときには連絡を受ける受け皿になるという立場をとった。できる範囲での見守りを続けていただき、急変時には救急要請を躊躇しないことを共有する。年末年始を何とか乗り切り、年明けに公的機関が再び動き始めてから制度的な手続きを進めた。

結果として大きな混乱は起こらなかった。

しかし、あのとき私が抱えていたのは、「何が正しいか」という問い以上に、立場・制度・時間・人間関係を同時に引き受ける重さだった。

あの出来事は、特別に劇的なケースだったわけではない。制度を越えた大きな社会問題でもない。

しかし、私にとっては「判断の置き場」がどこにもない時間だった。

福祉の仕事は、制度の内側で完結することばかりではない。制度に乗る前の相談、制度からこぼれ落ちる状況、時間的制約の中で判断を迫られる場面。

そうした局面では、最終的に個人の判断に委ねられる部分が少なくない。会議を開けば解決するわけでもない。関係機関に相談しても、常に判断を共有できるとは限らない。

ときに判断は、形式的な合議の背後で、個人の内側に落ちてくる。

マネジメントの立場にあればなおさらである。

主体は部下にあっても、責任は自分が負う。相談を受けても、最終的な方向づけは自分が引き受ける。そうした構造の中で、私たちは日々判断を重ねている。

それは、常に何かを背負い続ける構造でもある。背負っていることに気づかないまま、背負い続けることもある。

あの年末の出来事を振り返ると、私が求めていたのは「正解」ではなかったのだと思う。

何が正しいかを即座に示してくれる存在ではなく、立場、制度、時間、人間関係といった複数の要素を一度並べ直し、自分の思考の輪郭をはっきりさせる時間だった。

判断は最終的に自分が引き受ける。その構造は変わらない。

しかし、そこに至るまでの思考の過程を、誰かと対話しながら整理できたなら、あの重さは少し違ったものになっていたかもしれない。

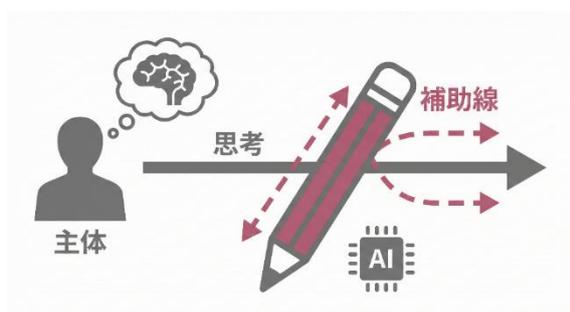
近年、生成 AI という技術が急速に広がっている。

私は現在、その活用を伝える立場にもいる。とはいえ、AI が関係機関との調整を担うわけではないし、責任を引き受けてくれるわけでもない。

けれども、思考を可視化し、自分の中で混線している論点を整理する「補助線」としてなら、

一定の役割を果たし得るのではないかと考えるようになった。

それは判断を委ねることではない。最終的に自分が背負うための準備を整えることに近い。



判断を背負う構造は、これからも変わらないだろう。

けれども、思考の過程まで孤立させる必要はないのではないか。

自分の考えを保ちながら、外に一度並べ直す方法はあるのか。

次回は、その可能性について、もう少し具体的に考えてみたい。